

北陸及び中国地方の甘藷栽培史(3)

元鹿児島県農業試験場大隅支場長 中馬 克己

第7章 平成初年から17年代

1. 政治経済、農業情勢、世相

長期停滞を脱し、平成15年（2003）度の経済成長率は3%を上回り、16年（2004）度は1.7%、17年（2005）度は3.2～3.5%などと好況であった。失業率は、15年度は13年ぶりに前年から低下した。平成16年（2004）度は4.7%、17年度は4.4%を示した。企業部門は改善の動きが広がるなど、景気に前向きの力が働いている。

食糧自給率は、長期的に低下傾向で推移しており、昭和40年（1965）度73%から14年度（2002）以来40%間で低下し、主要先進国の中では最低の水準となった。

わが国の食生活は、穀類を多く摂取するアジア諸国と、油脂類を多く摂取する欧米のほぼ中間に位置する日本型食生活を実現していたが、近年、油脂類の摂取過多や若い世代での欠食習慣などの問題が発生している。（平成16年度年次経済財政報告、平成15年度図説・食糧・農業・農村白書、インターネットによる調査）

2. 各県の甘藷生産状況の推移

表9と図5のとおりである。

畑面積は、北陸では新潟県が多く、石川県は新潟の38～36%で少なかった。平成2年（1990）度から17年度は、鳥取県と岡山県では約23～30%、広島県では約24%減少した。

甘藷の作付面積は新潟県が多く、鳥取県は最小であった。他の3県は2者の中間を示した。しかし、各県ともに17年度は2年度より約30%前後減少した。

さらに、作付率は各県ともに約4.0～1.5%と低かった。鹿児島県は畑面積も多く、作付率も15～20%と高かった。各県ともに、10a当たり収量は鹿児島県の約50～70%と低かった。

3. 各県の甘藷栽培

以下アンケート結果を主体に述べる。

(1)品 種

この時代に栽培されている品種は表10のとおりである。

広島県に平成9年度まで奨励品種があった。その後は、アンケート調査によれば、各県ともに、高系14号、ベニアズマ、金時などの栽培が見られている。いずれも食用種である。

(2)育苗の方法、(3)整地及び肥料、(4)植付けの方法、管理作業、(5)収穫及び貯蔵、利用及び食生活

これらの項目の解説は、およそ前章と同様であるので、ここでは省略する。しかし、用途別消費状況については表11によって説明する。

農家の保有量は、新潟県が約70～80%と高く、ついで鳥取、広島、岡山の各県で、石川

表9 平成2年から17年時代の北陸及び中国各県の甘藷生産状況の推移

(単位:面積ha,収量kg,作付率%)

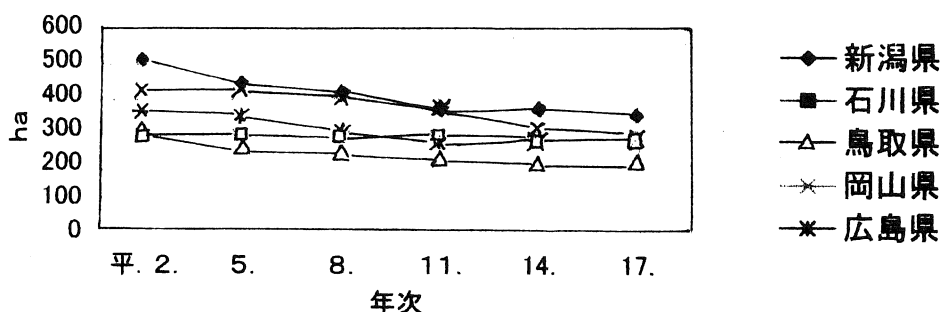
県別	調査項目\年次	平. 2.	5.	8.	11.	14.	17.	17/2
北陸地方 新潟県	畑面積:A	23500	17400	21600	21000	20200	19700	84%
	甘藷作付面積:B	508	438	412	372	358	342	67%
	10a当収量	1480	1320	1540	1490	1550	-	-
	作付率 B/A	2.2%	2.5%	1.9%	1.8%	1.8%	1.7%	-
石川県	畑面積:A	9040	5400	7650	7280	6990	7140	79%
	甘藷作付面積:B	281	284	276	286	268	267	95%
	10a当収量	1880	1460	1930	1840	1980	-	-
	作付率 B/A	3.1%	5.3%	3.6%	3.9%	3.8%	3.7%	-
中国地方 鳥取県	畑面積:A	14400	8600	13400	12800	11700	11100	77%
	甘藷作付面積:B	299	256	235	220	205	210	70%
	10a当収量	1690	1500	1910	1750	1790	-	-
	作付率 B/A	2.1%	3.0%	1.8%	1.7%	1.8%	1.9%	-
岡山県	畑面積:A	20600	13000	17600	15600	13900	14600	71%
	甘藷作付面積:B	420	419	392	365	297	267	64%
	作付率 B/A	1610	1460	1770	1660	1680	-	-
	作付率 B/A	2.0%	3.2%	2.2%	2.3%	2.1%	1.8%	-
広島県	畑面積:A	21400	9870	19000	17400	16200	16300	76%
	甘藷作付面積:B	360	336	284	263	272	268	74%
	10a当収量	1660	1460	1700	1660	1680	-	-
	作付率 B/A	1.7%	3.4%	1.5%	1.5%	1.7%	1.6%	-
参考 鹿児島県	畑面積:A	95200	75200	90600	88200	86600	85300	90%
	甘藷作付面積:B	19800	16400	14600	13500	11800	13500	68%
	10a当収量	2750	2100	2610	2510	3320	-	-
	作付率 B/A	20.8%	21.8%	16.1%	15.3%	13.6%	15.8%	-

(農水省統計情報部『作物統計』平. 2～13. 14. 17.、農水省『いも類に関する資料』平. 10. 14. 17.)

県は5～8%で最低であった。しかし、16年(2004)度は53%に急上昇しているが、その理由はよく判らない。市場販売量は、石川県が45～60%と高く、ついで岡山、広島、鳥取

県などで、新潟県は12～20%と低かった。しかし、アンケート結果では、ほとんど自家食用で、一部加工食品用に出荷すると記載されていた。

図5 平成2年から17年時代までの甘藷作付面積の推移



食生活は、全国的に均一になり、全く昭和50年（1975）代と変わらない。甘藷は一般には、野菜類の一環として自家用（焼き芋、油揚げ、大学芋、スイートポテト）、または加工食品としての利用が多くなった。しかし、南九州や関東地方の大産地では、でん粉用、焼酎用などの利用も多く見られている。（土田茂『インスタント時代の食品加工』、豊川裕之『昭和の食の変遷』）

要 約

1. 江戸時代

(1)北陸および中国地方への伝播

沖縄本島に慶長10年（1605）伝来してから、約230年を経過した天保8年（1837）に、やっと北陸の石川県金沢市に四国地方から伝播したという。新潟県については導入の記録がなかった。中国の島根県には、享保18年（1733）に井戸正明が鹿児島から移入し、次第に中国各地に伝播したという。

(2)政治経済、農業情勢、世相

江戸時代には、しばしば凶作・飢饉が生じ、農村や都市の貧しい人々に打撃を与え、生活をどん底におとし入れた。新潟県では、文政11年（1828）11月12日、信濃川下流域に大地震が生じ、大火災が発生し、死者も160余にのぼった。同13年（1831）、さらに天保2年

表10 平成2年代から17年代の甘藷奨励品種

県 別	年 次	品 種 名	備 考
新潟県	平. 2. ～17.	なし	平成初期からなし
石川県	平. 2. ～17.	なし	昭和50年代からなし
鳥取県	平. 2. ～17.	なし	昭和50年代からなし
岡山県	平. 2. ～17.	なし	昭和50年代からなし
広島県	平. 2. ～17.	高系14号、ベニコマチ	平成10年以來なしとなった。

（農水省『いも類の生産流通に関する資料』平. 7. 8. 9.

『いも類に関する資料』平. 1）

(1831)、4年から7年(1833～36)にかけて大凶作となった。飢餓人が道路にあふれたという。鳥根県では3年に1回の不作が生じ、50年あるいは33年毎に大飢饉が生じている。この時代までは、まだ甘藷の普及は見られなかった。

(3)栽培方法

当時の品種については明らかな記録がないが、石川県の方に金時、太白の記載が見られている。おそらく他県にも同様な品種が栽培されていたと思われる。なお、育苗の明らかな記録がない。整地は鋤と万能鋤を利用した。焼き畑の記録も見られている。利用は米食用の混合、または間食に利用した。

2. 明治から大正時代

(1)政治経済、農業情勢、世相

明治維新の改革で、もっとも打撃を受けたのは士族と農民であった。明治2年(1869)は全国的な凶作で、鳥根県の奥日野郡ではその打撃がひどく、百姓一揆が生じた。大正3年(1914)第一次世界大戦が勃発し、日本経済は活況を呈した。終結後には苦境に立たされた。

(2)生産状況の推移

明治16年(1883)からの統計資料がある。畑面積は新潟県が断然多く、甘藷の作付面積は広島県が甚大であった。10a収量は全般に低かったが、中では広島県が高かった。

(3)栽培方法

多くの在来品種が栽培された。育苗は北陸の新潟、石川県では藁囲い温床を作った。苗の購入が4～7割見られた。中国の岡山、広島県では温床または冷床を作った。なお少量の苗の購入が見られた。植え付けは5月中～

6月下旬に、畦幅約60～75cm、株間30～45cm、10a当り約4000本であった。肥料は堆肥を主とする自給肥料が主であった。収穫は10月上～11月下旬に鋤で行った。主食の混飯や間食に利用した。貯蔵は屋外または屋内の床下の縦穴に行った。

3. 昭和初期から終戦(昭和20年)時代

(1)政治経済、農業情勢、世相

昭和5年(1930)には世界的な大恐慌が発生し、日本経済も大打撃を受けた。農村にも深刻な影響を与え、全国的な農村恐慌となった。

20年(1945)8月15日に、昭和6年(1931)に始まった満州事変以来の「15年戦争」は日本の敗戦によって終結した。戦後の国民生活は苦しく深刻であった。

(2)生産状況の推移

昭和初期(1926)より20年(1945)は食糧補充のために、約30～60%近く高くなった。なお、鳥取、岡山県などは240～140%と高くなっているので、さらに調査したが間違いなかった。10a当り収量は、広島県が他の県より高かった。

(3)栽培方法

この時代の品種には、紅赤、花魁、千葉赤、金時、太白、源氏、七福など多くが見られた。育苗は藁囲いの温床、または冷床で行われた。各県ともに少量の苗の購入が見られた。植付けは、麦間または裸地に5月上～6月下旬に、畦幅60～70cmの高畦を作り、株間30～45cmに行った。肥料は自給肥料が主であった。収穫は10月上～11月上旬に鋤で行った。貯蔵は、屋内の床下や炉辺に縦穴に、または屋外の横穴または縦穴に、3月上旬頃

表11 平成4年から16年時代の甘藷用途別消費状況

(単位:量目トン、比率%)

県 別	項目\ 年次、比率	平. 4.	比率	7.	比率	11.	比率	16.	比率
北陸地方 新潟県	生産量	6650	100	6220	100	5540	100	5090	100
	農家保有量	4698	70	4465	72	4406	80	4072	80
	市場販売量	1420	19	1257	20	691	12	611	12
	減耗	532	11	498	8	443	8	407	8
石川県	生産量	5220	100	3836	100	5260	100	5640	100
	農家保有量	239	5	308	8	310	6	3010	53
	市場販売量	3200	61	2127	55	2440	46	2400	43
	減耗	1781	34	1401	37	2510	48	230	4
中国地方 鳥取県	生産量	4790	100	4210	100	3850	100	3280	100
	農家保有量	3328	69	2820	67	2595	67	2959	90
	市場販売量	992	21	995	24	947	25	253	8
	減耗	470	10	395	9	308	8	68	2
岡山県	生産量	7240	100	6590	100	6460	100	5740	100
	農家保有量	4210	58	2671	41	5789	90	1060	18
	市場販売量	2740	38	3669	55	128	2	3378	59
	減耗	290	4	250	4	543	8	1302	23
広島県	生産量	5750	100	5150	100	4370	100	4340	100
	農家保有量	3147	55	2954	57	2681	61	2873	66
	市場販売量	1798	31	1485	29	1231	28	1165	27
	減耗	805	14	711	14	458	11	302	7

(農水省『いも類の生産流通に関する資料』平. 6. 10. 12.、『いも類に関する資料』平17.)

注1:農家保有量は食用、飼料用、種子用などである。

注2:市場販売量はほとんど県内のみであった。

注3:石川県の7年度の生産量の激減については説明の記載はなかった。

まで行った。約7割を食用にし、約3割を貯蔵した。

4. 昭和20年(戦後)から40年時代

(1)政治経済、農業情勢、世相

戦後の国民生活は非常に苦しく、戦争の傷跡は容易に回復しなかった。何よりも苦しん

だのは食生活であった。25年～28年(1950～53)の朝鮮戦争の特需景気で息を吹き返し、30年～32年(1955～57)には「神武景気」と呼ばれる大型景気を迎えた。さらに30年(1955)以来の米の大豊作により食糧需給は好転した。食生活も豊になり、日本人の体格はいちじるしく向上した。

(2)生産状況の推移

甘藷の作付面積は、食糧需給の好転に伴って、35年（1960）以降には減少した。そして40年（1965）には、戦後の22年（1947）より、新潟県では約57%に、他の県では、約30～45%と多く減少した。畑作地帯の鹿児島県（でん粉工場地帯）では30年以降、逆に高くなっている。

(3)栽培方法

各県ともに栽培されている品種は、農林1号、2号、沖縄100号などであった。育苗には、露地ビニール育苗が主であった。広島県の島嶼地帯では露地育苗も行われた。30年（1955）頃から、全国的にテラー型耕耘機、そのほかの耕耘機が普及して、これによって耕耘作業も行われるようになった。肥料には各種の化成肥料が出回るようになった。利用は水稻の豊作のために、甘藷は間食などに利用されるのみとなった。

5. 昭和40年代後半から60年代

(1)政治経済、農業情勢、世相

国民総生産（GNP）は43年（1968）にはアメリカに次ぐ第二位の規模に達した。農耕の機械化と農村生活の近代化が進んだ。米を例外として日本の食糧自給率が急激に低下した。しかし、食生活は豊になり、体格はいちじるしく向上した。

(2)生産状況の推移

甘藷の作付面積は、各県ともに50年（1975）には食糧が十分となり大きく低下し始め、63年（1988）には、45年（1970）の約40～60%に低下した。なお、作付率も同様に50年から低下し約1.5～2%になった。

(3)栽培方法

各県ともに、栽培されている品種は、農林1号、2号、高系14号、ベニコマチなどであった。育苗には、露地育苗、電熱の温床育苗、またはハウス内のビニール育苗などが行われている。全国的にテラー型耕耘機、そのほかの耕耘機が普及して、耕耘作業も行われるようになった。肥料の施用は化成肥料の全面散布が多い。甘藷は間食などに利用されるのみとなった。

6. 平成初年から17年時代

(1)政治経済、農業情勢、世相

平成15年（2003）度の経済成長率は約3%、16年（2004）度は1.7%、17年（2005）は3.2～3.5%などと好況であった。なお、失業率は15年度には13年ぶりに、前年度から低下したが、16年度は4.7%、17年度は4.4%を示した。食糧自給率は14年（2002）度以来40%に低下し、主要先進国の中では最低の水準となっている。近年、油脂類の摂取過多や、若い世代での欠食習慣などの問題が生じている。

(2)生産状況の推移

甘藷の作付面積は新潟県が多く、鳥取県は最小であった。各県ともいずれも平成17年度は2年度より約30%減少した。

(3)栽培方法

各県ともに栽培されている品種は、農林1号、2号、高系14号、ベニコマチなどであった。その他の栽培法は、ほとんど前記と同様であった。育苗には、露地育苗、電熱の温床育苗、またはハウス内のビニール育苗などが行われている。甘藷は間食などに利用されるのみとなった。

引用文献及び資料

日本甘藷馬鈴薯株式会社 1948 さつまいも及びじゃがいもの渡来 新生社
農林省農務局 1937 雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱 大日本農会
小林 仁 1986 サツマイモのきた道 古今書院
山田尚二 1994 さつまいも伝来と文化 春苑堂
石井 進他 1999 詳説日本史 山川出版社
長谷川浩他 1955 甘藷の成育と地温との関係 九州農研16
小野武夫 1942 日本農業起源論 日本評論社
木下清左衛門 1842 岡 光夫訳1978 家業伝(大阪府) 日本農業全集 8 農文協
中馬克己 2003 甘藷の在来品種「元気」「源氏」「七福」「蔓無源氏」などの調査 いも類振興情報77 (財)いも類振興会
農林水産省統計情報部 1983 都道府県農業基礎統計 明. 16～昭. 55
東畑精一編 1953 牛馬耕の分布 日本農業発達史1 中央公論
岡山県 1983,86 明治前期の農業生産と農業技術 岡山県史10,15
島根県西郷町(隠岐) 1976 食事 西郷町誌 下
島根県大和村 1981 不作と飢饉 大和村誌上
黛 弘道他 2001 詳説日本史 清水書院
石川県農試 1937 石川農試業務功程 昭12
鳥取県農試 1940,57,60 鳥取農試業務功程 昭15、32、35

農文協会 1985～91 新潟、石川、鳥取、岡山、広島各県の食事 日本食生活全集 15,17,31,33,34、37
鳥取農試佐伯分場 1951 鳥取農試業務功程佐伯分場 昭26
広島農試 1952,1960 広島農試研究年報 昭27,35
農林省農業改良局 1955 甘藷直蒔栽培に関する研究
日本農業研究所 1970 かんしょ作(品種、栽培、他)戦後農業発達史 3. 畑作編
豊川裕之 1999 昭和の食の変遷 講座食の文化 2巻 日本の食事文化 味の素
農水省 1969,1972,1975 甘しょの生産流通に関する現状 昭44,47,50
土田 茂 1997 インスタント時代の食品加工 昭和農業技術発達史6 農水技協会
経済企画庁 2005 平成17年度 図説・食糧・農村白書
農水省統計情報部 1990～2005 作物統計 平2～17
農水省 1998～2005 いも類に関する資料 平10～17,

(完)

